

中学校道德 沖縄県郷土資料集

指導案例



1. おばあは喜劇の女王 ^{なか ださちこ} —仲田幸子— 2
2. 平和の道をたどる起点
—ひめゆり平和祈念資料館— ^{きねん} 4
3. 沖縄愛楽園を訪ねて 6
4. 伝統をつなぐ ^{りゅうきゅう ぶよう か みや ぎ ゆき こ} —琉球舞踊家 宮城幸子— 8
5. ルーツを訪ねて —世界のウチナーンチュー—10
6. 世界自然遺産12

日文の Web サイト

日文 🔍



琉球大学 教授
監修 上地 完治



心が動く、その先へ。

日本文教出版

おばあは喜劇の女王

なかださちこ
—仲田幸子—

◇内容項目：A-4 希望と勇気 克己と強い意志

より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気をもち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。

① ねらい

仲田幸子さんの生き方から目標や希望をもつことの大切さを理解し、その達成のために困難なことがあっても目標を見失わず、乗り越えやり抜こうとする実践意欲を育てる。

② 主題設定の理由

(1) 指導内容について

本教材『おばあは喜劇の女王』は、沖縄の戦後復興期において、困難な状況乗り越えながら人々に笑いと希望を届けた仲田幸子さんの生き方を描いている。戦争によって多くを失い、苦しい生活を送る中で、彼女は幼少期から抱いていた「舞台に立ちたい」という夢を諦めず、幾度となく困難に直面しながらも、それを乗り越え成長していく。特に、劇団での厳しい修行や無名時代の苦労を経て、観客の笑いと拍手を通じて自らの役割を見出し、いく過程は、強い意志と努力の大切さを学ぶ上で重要な要素となる。

また、当時の沖縄では伝統芸能が主流であり、喜劇という新たなジャンルに挑戦することは容易ではなかった。しかし、仲田幸子さんは、人々が「笑い」を求めていることに気づき、自身の演技に磨きをかけながら、沖縄喜劇を確立していった。その過程には、自らの夢を実現するためのたゆまぬ努力をするだけでなく、困難に対して柔軟に対応し、工夫しながら道を切り開く姿勢が見られる。

このような彼女の生き方を通じて、生徒たちは、単に目標をもつことの大切さを学ぶだけでなく、困難があったとしても工夫しながら乗り越え、最後までやり抜くことの重要性を理解することができる。また、彼女が決して一人で夢をかなえたのではなく、劇団の仲間や家族、観客といった多くの人々に支えられていたことにも注目すれば、生徒たちは、自らの目標達成のためには他者との関わりや支え合いが欠かせないことにも気づくことができる。

本教材では、仲田幸子さんの人生を通して、夢や希望をもち、それに向かって努力することの意義を考えさせるとともに、困難な状況においてどのように乗り越えていくかを考える機会を提供する。さらに、仲田幸子さんが「人々を笑顔にすること」を生きがいとしたように、自分自身が誰かに与えられる影響についても考えさせ、実践意欲の向上につなげることを目指す。

(2) 生徒の実態について

中学生の時期は、人格形成の過程にあって不安定で、さまざまなことに思い悩む時期である。自己肯定感が低下しやすく、目標に向かって努力する意欲が揺らいだり、困難に直面すると諦めたり、自分にはできないと考えてしまうことも多い。また、周囲の評価を気にするあまり、失敗を恐れて挑戦を避ける姿勢が見られることもある。その一方

で、自分の得意なことや好きなことを見つけたときには、それに向かって積極的に取り組む姿勢を見せることも少なくない。

こうした実態を踏まえ、本時では、仲田幸子さんが何度も挫折しながらも夢を諦めず、強い意志をもって努力し続けた姿に焦点を当てる。彼女が経験した困難と、それを乗り越える過程を知ることで、生徒自身も「困難があっても乗り越えられる」「工夫しながら努力を続けることが大切だ」と実感できるようにする。また、彼女が多くの人々に支えられながら自らの道を切り開いたことに着目し、「一人ではなく、周囲と協力しながら目標に向かうことの大切さ」を学ぶ機会としたい。

(3) 教材について

沖縄の伝統芸能に触れる機会が少ない生徒にとって、本教材は新しい文化的視点を提供する貴重な学びとなる。多くの生徒は、沖縄の伝統芸能や喜劇の歴史を十分に知らず、芸能が戦後の沖縄の復興において人々の心の支えになっていたことへの理解も浅い。本教材を通じて、芸能が単なる娯楽ではなく、困難な状況を生き抜く力となり、人々を結びつける役割を果たしていたことを知ることができる。また、仲田幸子さんが「笑い」に込めた強い思いに触れることで、芸能を通じて人々の心を動かし、社会に貢献することの意義を考えさせることができる。さらに、彼女の挑戦と努力の過程を知ることで、生徒たちは克己と強い意志の大切さをより深く理解することができる。沖縄の歴史や文化と関連づけながら学ぶことで、自らの目標や困難に向き合う力を育む契機となる。

③ 教材活用のポイント

- 仲田幸子さんの生き方を困難を乗り越える姿勢と結びつけ、夢を追うための強い意志の大切さを考えさせる。
- 沖縄の伝統芸能と喜劇の文化的背景を理解し、芸能が人々に与えた影響や社会との関わりを深く学ぶ。
- 笑いを生み出す背景にある努力や工夫に着目し、表に見えない苦労や挑戦を考えさせ、強い意志と苦労と挑戦の間にはつながりがあることを捉えさせる。

④ 他教科等との関連、家庭・地域との連携等

社会科と連携し、戦後の沖縄の復興や伝統文化の変遷を学ぶ。また、総合の授業と連携して、家庭や地域と協力し、沖縄の伝統文化や芸能の意義について調べる活動を取り入れる。

⑤ 評価のポイント

- 仲田幸子さんの生き方を通して、夢や希望をもつことの意義について自分なりの考えをもつことができたか。
- 困難な状況でも目標に向かって努力し続けようとすることの大切さについて深く考える姿勢が見られたか。

6 学習指導過程

	生徒の学習活動	主な発問と予想される生徒の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 仲田幸子さんに関する写真や短い動画を提示して、沖縄の芸能について考える。	○ 沖縄の「喜劇の女王」仲田幸子さんを知っていますか。 ・ 名前は聞いたことがあるが、よく知らない。 ・ テレビで見たことがある。	○ 知らない生徒が多いと思われるので簡単な映像を見せる。
展開	(2) 教材「おばあは喜劇の女王—仲田幸子—」を読んで話し合う。	○ 仲田幸子さんが子どもの頃、村芝居を見て、自分もあそこに立ちたいという夢をいだいたのはなぜだと思いますか。 ・ 自分もきれいな衣装を着て舞台に立ちたいと思った。 ・ 村芝居が生活が貧しい中で唯一の楽しみだった。 ○ 仲田幸子さんは、どのような困難を乗り越えて舞台に立ち続けてきたのでしょうか。 ・ 初舞台のとき、わずかなセリフもうまく言えずに泣いた。 ・ とりえがないと言われて、認めてもらえなかった。 ・ 劇団では叱られてばかりで、褒められたことがなかった。 ・ 戦後の混乱している中で笑いを届けることはとても大変だったと思う。 ◎ 仲田幸子さんはどうして喜劇役者として無我夢中で取り組み続けることができたのでしょうか。 ・ 小さいころからの夢だったから、諦めたくなかった。 ・ 観客が笑ってくれたことで、自分のやっていることに意味を感じたと思う。 ・ 認めてもらえなくても、努力を重ねれば成長できると信じていた。 ○ 困難があっても目標に向かってやり抜くために、どんなことが大切でしょうか。 ・ 自分が本当にやりたいことを忘れないようにする。 ・ できたことを振り返って、自分を少しずつ認める。 ・ 小さなことでも毎日コツコツ続けること。 ・ うまくいなくても、自分を責めすぎないようにする。	* きれいな格好をして舞台に立っている役者が輝いて見えた、自分もあそこに立ちたいという思いのほかに、戦後の貧しい暮らしの中で人々に笑顔と生きる力を与えたものの一つが歌やお芝居だったという時代背景を押さえる。 * 仲田幸子さんが直面した困難について丁寧に把握させる。 ▲ 自分自身が仲田幸子さんと同じ境遇になった場合どうしますか。 * 仲田幸子さんと自分とを比較させて、自分ごととして関わらせていく。 ▲ もし、努力し続けてもうまくいかなかったとしたら、仲田幸子さんはどうしたと思いますか。 * 仲田幸子さんの生き方について考えるだけで終わらず、自分たちの生活に活かそうとする意欲を共有する。 ○ 「できない」「無理かもしれない」という気持ちを否定せず、寄り添いながら受け止める。 ○ 子どもの発言に対して「目標を諦めそうになった時はどうする？」や「『やり抜く』って、どういう状態だと思う？」などと、問い返していくことで、子どもの真意を引き出していく。 * 教材を通して考えたことを整理しながら、自分ごとに引き寄せて考えさせる。
終末	(3) 本時で学習したことを書く。	○ 今日の道徳の学習であなたが考えた事を、道徳ノートに書きましょう。	* 本時の学習について一人で考えさせることで、自分の考えを整理させる。

平和の道をたどる起点 きねん —ひめゆり平和祈念資料館—

◇内容項目：D-19 生命の尊さ

生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること。

① ねらい

ひめゆり平和祈念資料館の展示内容を通して、戦争が何気ない学校での日常生活を非情にも奪っていく恐ろしいものだということに気づき、現代に住む我々が戦争の悲惨さについて自分ごととして考えようとする態度を育てる。

② 主題設定の理由

(1) 指導内容について

ひめゆり平和祈念資料館の展示を通じて、生徒たちは戦争の恐ろしさとその結果に直面し、平和がどれほど貴重なものであるかを強く認識する。ひめゆり学徒隊が経験した苦難は、戦争の破壊的な結果の象徴であり、それを避けるためには、平和であり続けることがどれほど重要であるか学ぶ必要がある。

ひめゆり平和祈念資料館の存在は、過去の戦争の記憶と教訓を保存し、次の世代に伝える役割を果たしている。私たちが悲惨なひめゆり学徒隊の体験を学ぶことで、自分たちが平和の保持と戦争の回避に責任をもつことを理解し、過去の教訓から学ぶことで、自分たちがどう平和のバトンを次の世代に繋いでいくかを見つけられる。生徒たちは本文を通じて、平和を守るための自分たちの役割を探求し、より多面的・多角的に考えることができる。

そこで本時では、ひめゆり平和祈念資料館のリニューアルされた展示内容を取り上げることで、戦争というものは自分たちと同世代の人の当たり前の日常をも非情に奪っていくものだという恐ろしさに気づかせ、また、だからこそ平和を一人ひとりが担っていくことが大切であることを理解させたい。そして生命の尊さや平和の大切さについて自分ごととして考え、引き継ぐ態度につなげていきたい。

(2) 生徒の実態について

この時期の中学生たちは、少なくとも年に一回は平和学習を通じて沖縄戦について学ぶ機会があるため、戦争の悲惨さや恐ろしさについてある程度理解している。しかし、戦後80年が経過し、身近に戦争体験者が存在しない場合も多く、彼ら自身が戦争と無関係であるかのように感じてしまうことが少なくない。彼らの視点から見れば、沖縄戦は遠い国の出来事のように、自身の日常生活とは遠く離れた存在として捉えられがちである。本時では、沖縄戦を身近な問題として認識し、戦争の真の恐ろしさと生命の尊さ、平和の尊さを改めて深く考え、次世代の平和の継承者としての自覚を高めることを目指していきたい。

(3) 教材について

本教材は、沖縄戦をひめゆり学徒隊として体験した人々が、その悲惨な体験と平和への願いを後世に伝えるために建てたひめゆり平和祈念資料館の思いと、そこまでの苦悩

や決断の過程が描かれている。証言者の高齢化が進み、直接の戦争体験者からの語り継ぎが難しくなる中、この重要な歴史とメッセージを受け継ぎ、戦争を知らない世代に伝えていくひめゆり平和祈念資料館の役割と取り組みに触れることを通じて、生徒たちは沖縄戦という悲劇の実情を理解し、戦争の悲惨さと平和の価値について深く考える機会を得ることが出来る。そして、戦争が私たちの生活の当たり前の日常をも非情に奪っていくものだということを、現代に住む自分たちが「自分ごと」として考えることで、平和を引き継ぐ態度につなげていきたい。

③ 教材活用のポイント

- 教材の中のひめゆり学徒隊の経験とひめゆり平和祈念資料館の建設の背後にある思いについて深く考えさせる。
- 沖縄戦とその後のひめゆり平和祈念資料館の建設とが、どのように平和に結びついているかを生徒たちに理解させる。
- 戦争体験者がいなくなる現代において、生徒たち自身がどのように平和のバトンを受け継いでいくべきかについて、自分ごとで考えさせる。

④ 他教科等との関連、家庭・地域との連携等

総合的な学習の時間や歴史の授業では戦争の背景や経緯を学び、国語の時間には当時の人々の手記や文学作品を通じて戦争の影響や人々の感情を理解することが出来る。

⑤ 評価のポイント

- 戦争の真の恐ろしさや身近にある平和の大切さについて考えることで生命の尊さを見つめる姿勢が見られたか。
- 沖縄戦から学んだことを自分ごととして考え、これから自分たちが出来ることについて考えを深めることができたか。

6 学習指導過程

	生徒の学習活動	主な発問と予想される生徒の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 沖縄戦についてイメージを共有する。	○ 沖縄戦について知っていることやイメージをみんなで共有しましょう。 ・多くの人の命が無くなるもの。 ・強制で自決させられた戦争。 ・住民の戦争参加の恐ろしさ。 ・かわいそう、恐ろしい等。	* 個人が考える沖縄戦のイメージを共有することで、本時の教材への方向づけを行う。 ○ 事前アンケートを使い、生徒の考えをまとめると沖縄戦のイメージや他者の考えを共有しやすくなる。(Google フォームやテキストマイニングなどを活用)
展開	(2) 教材「平和の道をたどる起点—ひめゆり平和祈念資料館—」を読んで考え、話し合う。	○ なぜ、奇跡的に生き延びたひめゆり学徒隊の生存者は、自分の体験を語ろうとしなかったのですか。 ・これまで罪悪感で苦しくて話せなかった。 ・再びその恐怖を感じることを避けたい。 ○ それでも、ひめゆり学徒隊の生存者が沖縄戦での経験を伝える資料館を建設しようと思ったのはなぜでしょうか。 ・自分自身の経験を伝えることで戦争の悲惨さを伝えることが出来る。伝えなければならない。 ・亡くなった人の分まで頑張りたい。 ・二度と戦争を繰り返さないためには、つらくても沖縄戦で体験したことを伝える必要があるから。 ・死んでいった学友の思い出を残すため。 ○ 資料館の展示を見ても話を聞いても「ピンとこない」という感想をもってしまうのはなぜだと思いますか。 ・自分自身の体験との大きな違いがあるから。 ・戦争体験者もいなくなり、風化しつつあるから。 ◎ リニューアルした資料館の展示は、私たちに何を訴えかけているのでしょうか。 ・戦争の悲惨さ。 ・平和の大切さ。 ・自分たちと同じ若者が命を落とした戦争を繰り返してはいけないということ。 (補助発問に対して予想される発言) ・楽しそう。 ・自分たちと同じような日常の風景。 ・当たり前の日常を奪う戦争の恐ろしさ。	* 戦後、伝えることは大切だと思いながらも悩み、生きることさえも苦しむ人々の心情に触れさせることで、戦争の悲惨さに気づかせる。 * 生徒たちに戦争の実態と現代の価値観とのギャップを認識させ、自分ごととして戦争との関わりを考えさせる。 ○ 展示内容が伝えようとしていることを、子どもたち一人ひとりが自分ごととして深く考えていけるように促したい。 ▲ 生徒のサイン帳や写真を見てどう思いますか。 * ひめゆり学徒隊にも自分たちと同じような日常があったこと、そしてその日常が簡単に奪われてしまった戦争の悲惨さについて自分ごと引き寄せて考えさせる。
終末	(3) 本時の振り返りを書き、全体で共有する。	○ 今日の道徳の学習であなたが考えたことや学んだことをノートに書きましょう。	* 道徳ノートに「考えたこと」を書かせ、全体でその内容を振り返らせることで、生徒一人ひとりの価値を深めさせる。

沖縄愛楽園を訪ねて

◇内容項目：C-11 公正，公平，社会正義

正義と公正さを重んじ，誰に対しても公平に接し，差別や偏見のない社会の実現に努めること。

① ねらい

長い間，苦しんできた愛楽園の入所者について知ること，差別や偏見による排除を傍観してしまう人間の弱さに気づき，差別や偏見のない社会にしたいという実践意欲と態度を育てる。

② 主題設定の理由

(1) 指導内容について

ハンセン病とは，「らい菌」に感染することで起こる病気で，発病すると主に皮膚や末梢神経が侵され，痛みや温度を感じることができず，やけどやけがを繰り返した結果として，手足や顔面などが変形するという後遺症が残ることがあった。そのため，感染力が弱く薬で完治するにも関わらず，長い間，ハンセン病患者は壮絶な差別に苦しんできた。

その差別は，「病気」に対する無知から来る恐怖心が引き起こすものではあるが，差別をさらに助長したものが，ハンセン病患者の隔離政策である。「らい予防法」が制定されると，患者の家には医師だけでなく警察官も訪れ，家中が消毒されたり，強制連行される者もいた。その光景は「ハンセン病はとても恐ろしい病気だ」という誤った認識を人々に植えつけただけでなく，患者本人のみならず家族への差別にもつながったのである。

ハンセン病患者に関わる差別の問題（＝ハンセン病問題）を知ると，「自分自身・自分が所属する集団の安全・利益を守るため」に，排除を認めてしまう人間の弱さ，社会の動きがよく分かる。ハンセン病問題を「避けて通る」という消極的な態度のままでは，いつ，いかなる場面でも差別が繰り返されてしまうことに気づき，そこに向き合うことで，差別や偏見のない社会を実現しようとする意欲と態度を育てたい。

(2) 生徒の実態について

本授業の前には，生徒がハンセン病問題や愛楽園についてどの程度知っているのか事前調査は必要である。しかし，生徒の認知度に差があったとしても，本時が病気そのものの理解だけに終始することがないようにしたい。

中学生の時期には，偏った見方から不公平な態度をとる場合や，不公正であったとしても，多数意見に同調したり傍観したりするだけで，いじめや不正を制止できないことがあるだろう。

同調圧力に流されてしまう，傍観者であり続ける態度は，ハンセン病問題の本質にも通じるものであり，本時では，人間の弱さを自覚し，差別や偏見といった社会的問題を見だし，その解決に向けて協働して話し合いができる生徒，学級を育みたい。

(3) 教材について

沖縄には2つの療養所があり，そのひとつが名護市の屋我地島にある沖縄愛楽園である。園内にある交流会館（資料館）を訪れた主人公が，学芸員の案内を受けたことで，ハンセン病問題をより深く理解し，そこに向き合おうとする姿が描かれている。また，授業者本人，生徒がハンセン病についてよく知らなくても，教材を読み進めるだけで，ハンセン病患者に対する差別の実態がある程度は知ることができるようになっている。

③ 教材活用のポイント

○教材を読む前の生徒の実態を把握し，主人公同様，ハンセン病について「知っている」ことがいかに浅い知識であったかを実感させる。

○「人々は恐怖を感じたんでしょうね」「『病気の感染拡大を防ぐ』という大義名分のもと」「ここに収容されたのは，『法律で決まっている』からだけでしょうか」のように，ハンセン病問題の本質を考えられるような発問が教材のセリフになっている。

○生徒の発言に対して問い返したり，本時のねらいに迫るためにも，授業者によるハンセン病問題の事前研究は必要である。

④ 他教科等との関連，家庭・地域との連携等

厚生労働省から中学2年生を対象にハンセン病理解のパンフレットが全員に配布されるなど，ハンセン病問題は過去の問題ではなく，現代社会にも通じる問題として学ぶことが求められている。本教材では，裁判については詳しく触れていないが，原告の元患者らは「差別をした人」を訴えているのではなく「国の誤った政策」を訴えている。その意味を深く考えることは，ハンセン病問題の本質にせまることになる。よって総合的な学習や社会科，道徳科等で裁判を取り上げた発展的な学習が期待できる。

⑤ 評価のポイント

○自分を守るという正義を盾に，不公正な態度をとってしまう人間の弱さ，問題の本質を「避けて通る」消極的な態度を自覚できる記述や発言があるか。

○「差別はなくならない。なくなっていない」のような記述ではなく，何かできることはないかを探す前向きな姿勢，記述があるか。

⑥ 學習指導過程

[illegible]

伝統をつなぐ

りゅうきゅうぶようか みやぎゆきこ
—琉球舞踊家 宮城幸子—

◇内容項目：C-16 郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度

郷土の伝統と文化を大切にし，社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め，地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し，進んで郷土の発展に努めること。

① ねらい

宮城幸子さんの生き方を通して，郷土の伝統を愛し，それを先人から大切に受け継いでいこうとする実践意欲を育てる。

② 主題設定の理由

(1) 指導内容について

本教材は，沖縄の伝統芸能である琉球舞踊を，戦後の混乱期から今日に至るまで守り，磨き続けてきた宮城幸子さんの姿を描いている。彼女は幼少期に出合った地元の舞台芸能に心を奪われ，中学卒業後には那覇に出て厳しい修行に挑んだ。理屈ではなく身体で覚えるという師の教えを胸に，挫折しそうになりながらも，島の言葉や文化とともに芸を継承し続けてきた。その歩みは，「伝統を受け継ぎ，次世代へ伝える」ことの難しさと，そこに宿る喜びや誇りを実感させてくれる。

本教材の価値は，単に琉球舞踊の技術を伝えることにとどまらない。伝統芸能とは，地域の言葉や文化，心の在り方を体现するものであること，そしてそれを受け継ぐとは単なる模倣ではなく，心を込めて継承する覚悟が必要であることを，宮城さんの言葉と行動が物語っている。特に「今日からまた歩み頑張ります」という言葉には，自らの使命を胸に，未来へと責任をもって歩もうとする強い意志が込められており，生徒に深い感動と問いを投げかける。

本教材では，生徒が宮城幸子さんの生き方から，郷土の伝統や文化に対して誇りをもち，それを次世代へつなぐとする意志を自分ごととして捉えられるようにすることを目指す。生徒自身が，身近な地域文化や習慣に目を向けるきっかけとなるよう促すとともに，「自分たちにも受け継ぐ役割があるのではないか」という問いをもたせる授業構成を意識したい。

(2) 生徒の実態について

中学生は，地域に根ざした文化行事や伝統芸能に触れる機会が限られており，沖縄の伝統文化に関して十分な理解をもっているとは言いがたい状況にある。特に，郷土芸能といえば「エイサー」などの有名な行事に限定して捉える傾向があり，琉球舞踊や島ことばといった沖縄文化の多様性について関心を深める機会が少ない。また，伝統を「古いもの」「自分たちには関係のないもの」と感じる生徒も少なくなく，地域の文化を自分自身と結びつけて考える姿勢を育むことが今後の課題である。こうした背景を踏まえ，今回の授業では，郷土の文化を守り受け継ぐために努力し続ける宮城幸子さんの姿に触れ，自らの地域や文化に対する誇りを育み，「自分にもできることがあるのではないか」と考えるきっかけとしたい。

(3) 教材について

本教材は，沖縄の伝統芸能である琉球舞踊の継承者・宮城幸子さんの半生を描くことで，「伝統とは何か」「それを受け継ぐとはどういうことか」という本質的な問いを投げかける作品である。彼女が大切にしてきた「身体で覚えること」や「島ことばで伝えること」は，単に技術の継承にとどまらず，文化や心の在り方までも次世代に手渡そうとする深い意志の表れである。また，「今日からまた歩み頑張ります」という言葉に象徴されるように，伝統を守ることとは過去をなぞることではなく，未来へ向けて責任をもって一歩ずつ進んでいく姿勢そのものであることを伝えている。生徒にとっては，普段あまり触れることのない琉球舞踊という文化への理解を深めるとともに，「伝統」と「自分自身」の関係について考えるよい契機となる。

地域の文化や芸能を知り，それを尊重する態度を育むには，文化を支えてきた人々の思いや努力を知ることが重要であり，本教材はまさにその点を具体的かつ情感豊かに伝えてくれる内容となっている。

③ 教材活用のポイント

- 「今日からまた歩み頑張ります」という序盤の言葉を手がかりに，伝統を受け継ぐ者としての覚悟や未来への意志に注目させる。
- 「島ことば」で技を伝える姿や，「体で覚える」教えから，文化の継承は言葉や身体感覚と深く結びついていることを考えさせる。
- 中心発問で，子どもの発言に対して「情熱だけで続けていけるのかな」や「なぜ，伝統文化を守る必要があるのだろう」などと問い返していくことで，子どもの真意を引き出していく。

④ 他教科等との関連，家庭・地域との連携等

社会科における地域の歴史や文化の学習と関連づけることで，伝統芸能の意義への理解を深める。家庭での地域行事への参加経験を振り返ったり，生徒が調べてみたい課題を設定し，調べ学習を行う。

⑤ 評価のポイント

- 宮城幸子さんの生き方を通して，郷土の伝統や文化の価値について理解し，自分の考えを表現しようとしていたか。
- 郷土の伝統を受け継ぐことの大切さについて，自分なりの言葉で考え，生活や行動に活かそうとする姿勢が見られたか。

6 学習指導過程

	生徒の学習活動	主な発問と予想される生徒の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 沖縄の伝統文化について話し合う。	○ 「沖縄の伝統文化」と聞いて思い浮かぶものは何ですか。 ・「エイサー」「三線」「紅型」「琉球舞踊」 ・昔の人がやってたこと。 ・正月やお盆の行事。	* これまで学んだ沖縄の伝統について想起させることで、教材への方向づけを行う。 ○ 事前にエイサーや琉球舞踊の写真、イラストを用いて沖縄の伝統文化について子どもがイメージしやすいようにする。
展開	(2) 教材「伝統をつなぐー琉球舞踊家 宮城幸子ー」を読んで話し合う。	○ 宮城幸子さんが琉球舞踊を始めるきっかけとなった出来事は何でしたか。 ・村にきた劇団の舞台を見たから。 ・有名な踊り手の舞台に感動した。 ・指導者に那覇へ行った方がいいと勧められた。 ○ 那覇に出てから、宮城さんはどのように琉球舞踊を学んでいきましたか。 ・家事や子守をしながら稽古の時間を作って、毎日くり返し練習していた。 ・先生に「体で覚えなさい」って言われて、何度と同じ動きを体に染み込ませるように練習していた。 ・鳥ことばで細かい動きを伝えられて、言葉の意味や気持ちも一緒に学んでいた。 ◎ 宮城幸子さんの琉球舞踊への情熱を支えているものは何でしょうか。 ・踊りが“好き”という気持ちが、何よりの原動力になっていたと思う。 ・師匠の言葉や教えが、厳しくてもあたたかくて、大切なものとして心に残っていたんじゃないかな。 ・“伝統を守る”という責任感や使命感があったからだと思う。 ○ 伝統文化を受け継ぐことは、今の私たちににとってどんな意味があると思いますか。 ・伝統があることで、自分たちのルーツが分かれると思う。 ・自分も伝統芸能だけでなく、これまで先人が築いてきた何かを受け継ぐ立場になるのかもしれないと思った。 ・伝統って“古い”だけでなく、“今”にも共通することがあり、必要なものなんだと分かった。	* 沖縄の伝統芸能が人生の進路や目標を生むことがあるという視点を持たせる。 ○ 初めから沖縄の伝統芸能に本気で関わろうとしていたのではなく、ちょっとしたきっかけから芸能に関わっていったことを押さえる。 * 踊りの「型」だけでなく、真境名先生から文化全体を学んでいたことに注目させる。 ○ 生徒が「自分だったら耐えられるかな…」と感じる部分をあえて残し、そこから「なぜ続けられたのか」への問いにつなげる。 * 「努力」や「継続」だけでなく、その背景にある「思い」や「信念」に気づかせ、価値的側面に焦点をあてる。 * 宮城幸子さんと生徒自身を重ね合わせることで自分ごととして考えさせる。 ▲ 伝統文化を受け継がなかったら何が失われると思いますか。 * これまでの先人たちのたゆまぬ努力によって文化が受け継がれていることを捉えさせたい。 * 「伝統文化＝自分とは遠い存在」という感覚を乗り越え、「今の自分」とのつながりを見出す視点を育てる。 ○ 「受け継ぐ＝完璧に再現すること」ではなく、「心に留める」「関心をもつ」「伝える姿を見る」ことも継承の一步であると認める。 ○ 生徒の発言に対して「特にどんな伝統を大切にしていきたい？」や「伝統文化の中から関わっていきたいものは？」などと問い返していくことで、子どもの真意を引き出していく。 * 宮城幸子さんの生き方を通して考えたことを整理しながら、自分ごとに引き寄せて考えさせる。
終末	(3) 本時で学習したことを書く。	○ 今日の道徳の学習であなたの考えた事を、道徳ノートに書きましょう。	* 本時の学習について一人で考えさせ、自分の考えを整理させる。

ルーツを訪ねて ―世界のウチナーンチュ―

◇内容項目：C-16 郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度

郷土の伝統と文化を大切にし，社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め，地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し，進んで郷土の発展に努めること。

① ねらい

沖縄から海外へ移住した人々や、「世界のウチナーンチュ大会」に参加する人々の思いを理解することを通して，沖縄の伝統や文化が私たちに与えてくれるものについて考えようとする態度を育てる。

② 主題設定の理由

(1) 指導内容について

近年，地域や郷土の伝統や文化に対する興味や自覚が薄れつつある現状がある。都市化が進行し，多様な情報や文化が日常にあふれている中で，自らのルーツや背景を意識する機会は逆に減少している。沖縄は日本の中でも独特の歴史と文化をもつ地域であり，その背景や価値観を理解することは，多様な文化への理解や尊重の精神を育む上で非常に有意義である。また，沖縄の「ウチナーンチュ」のような強い絆や伝統が，異なる文化や環境の中でも継続的に受け継がれている事例は，郷土や文化の大切さを再認識する上で大変貴重であるといえる。特に，今の世代はグローバル化や価値観の多様化の中で，自分たちのルーツや文化をどのように受け止め，どのようにして次世代に継承していくかという課題を持っている。そこで生徒たちは沖縄の人々がどのようにして自らのアイデンティティを守り，また共有し続けてきたのかを学ぶことで，自らのアイデンティティや郷土への愛着を再考するきっかけとなる。

そこで本時では，まずは「沖縄の歴史を知ること」に焦点を当てて考えさせていきたい。自分たちの住んでいる郷土沖縄は，先人たちの努力や願いが結集された場所であり，それを一人ひとりがどう受け継いでいくかを深く考える機会としたい。

(2) 生徒の実態について

現代の中学生は情報環境に恵まれているが，沖縄の文化やウチナーンチュのアイデンティティについての深い関わりは限定的である。多くの生徒が沖縄を観光地として認識しており，その深い背景や歴史については知らないことも多い。このため，本教材を通じて沖縄に関わりをもつ生徒は自らのルーツを再確認する機会として受け取ることも期待できる。沖縄県系の人々が世界に広がった背景や文化の継承について学ぶことで，生徒たちが郷土の自然や歴史を継承しようとしていくきっかけにしたい。ただし，沖縄にルーツを持たない子どもがクラスにいることも考えられるので，そのような子どもに対する配慮は必要である。

(3) 教材について

沖縄にルーツをもつウチナーンチュは全世界に42万人いるとされている。そこには，沖縄の経済的な理由が大きく影響している。多くの人たちは貧困から逃れるために海

外へと移住した。當山久三は移民を奨励する言葉を残している。異国での生活は決して楽ではなかったが，ウチナーンチュたちは沖縄への愛を持ち続け，子孫にその思いを伝えた。また，沖縄の支援活動も行っていた。「世界のウチナーンチュ大会」は1990年から始まり，文化交流の場として人々を引き寄せている。この大会から「世界ウチナーンチュの日」が提案され，制定された。ウチナーンチュの絆を通して人とのつながりの大切さを学ぶことで，生徒たちは自身のルーツやアイデンティティを意識するとともに多様な文化を尊重し，他者との共感や連帯の意識をもたせていきたい。

③ 教材活用のポイント

○沖縄にルーツをもつウチナーンチュの歴史と背景を詳しく知ることによって，生徒たちには自身のルーツや文化について考え，自己認識を深めさせたい。

○ウチナーンチュが異国での困難な環境下でも沖縄の文化や伝統を守り続け，さらに沖縄への支援活動も行っていたことを学び，その連帯や協力の精神の背景にあるウチナーンチュの思いを捉えさせたい。

④ 他教科等との関連，家庭・地域との連携等

社会科や総合的な学習の時間を活用し，沖縄の豊かな伝統文化や歴史に生徒たちの目を向けさせたい。その知識を基に，調べ学習を進めることで，より深い理解を促進していきたい。

⑤ 評価のポイント

○沖縄から海外へ移住した人々や、「世界のウチナーンチュ大会」に参加する人々の思いを理解し，沖縄の伝統や文化が私たちに与えてくれるものについて深く考えられたか。

6 学習指導過程

	生徒の学習活動	主な発問と予想される生徒の発言	発問の意図（*）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 文化についてイメージを共有する。	○ あなたが沖縄のことを誇らしく思うのはどんなときですか。 ・美味しいおばーの料理を食べた瞬間。 ・おじいちゃんの話聞いた瞬間。 ・昔の家族の写真を見つけたとき。 ・特にない。	* 個人が考える文化のイメージを共有することで、本時の教材への方向づけを行う。 ○ 事前アンケートを使い、生徒の考えをまとめると沖縄文化のイメージや他者の考えを共有しやすくなる。(Google フォームやテキストマイニングなどを活用)
展開	(2) 教材「ルーツを訪ねてー世界のウチナーンチュー」を読んで考え、話し合う。	○ なぜウチナーンチュは海外で暮らしていても、沖縄のことを忘れなかったのだと思いますか。 ・自分たちのウチナー文化と伝統への強い絆を感じていたから。 ・自分の家族や先祖への感謝の気持ちがあるから。 (補助発問に対して予想される発言) ・異文化に適応しなくてはならないし、言語の壁や異国での孤立感もある。 ・異文化との比較で沖縄の温かさや地域や親せきや家族の絆の強さを感じる時。 ○ なぜ、沖縄に住む人たちも、海外のウチナーンチュを温かく迎え入れるのだと思いますか。 ・絆を感じるから。 ・他人とは思えない。 ・誰に対しても温かく迎え入れる心がある。 ◎ 「世界のウチナーンチュ大会」のように、自分たちのルーツや文化を再確認することで私たちはどんなことが得られると思いますか。 ・ルーツを知ると、自分の物語が分かるような気がする。それで、自分を大事に思える。 ・いろんな文化の友達と話すと、新しい発見があり、お互いの違いを尊重できるようになる。 ・同じルーツや文化を持つ人との話は、より深い絆や共感を感じることができる。 ・自分の文化を知ること、他の文化にも興味を持つようになり、違いを尊重し合うことができる。	* 他者の視点で沖縄に対する思いを考えることで、現時点での自分自身の沖縄に対する価値観を確認させていきたい。 ▲ ウチナーンチュは海外でどんな体験をしたと思いますか。 ▲ ウチナーンチュが海外での経験を通じて、沖縄の価値を再認識する瞬間はどのような時だと思いますか。 * 自分たちのルーツである沖縄の良い部分や海外の視点から見た沖縄の文化を再確認させたい。 * 生徒たちにそれぞれの背景や価値観と、沖縄文化との関係を認識させ、伝統や文化が私たちに与えてくれるものについて自分ごととして考えさせる。 ○ 沖縄にルーツを持たない子どもに対しては自分のルーツで考えさせるなど、配慮を怠らない。
終末	(3) 本時の振り返りを書き、全体で共有する。	○ 今日の道徳の学習で自分たちの「ルーツ」や「文化」について考えたことをノートに書きましょう。	* 道徳ノートに「考えたこと」を書かせ、全体でその内容を振り返らせることで、生徒一人ひとりの価値を深めさせる。

世界自然遺産

◇内容項目：D-20 自然愛護

自然の崇高さを知り、自然環境を大切にすることの意義を理解し、進んで自然の愛護に努めること。

① ねらい

西表島で環境の保全に取り組む人々の活動について知ることを通して、自然と人との関わりを多面的・多角的に捉え、自然と人との共存について自分自身との関わりで考えようとする態度を育てる。

② 主題設定の理由

(1) 指導内容について

2021年、鹿児島県では奄美大島と徳之島、沖縄県ではヤンバルの森と西表島が世界自然遺産に登録された。これは、どのような意義があるのだろうか。また登録後の私たちの生活はどのように変わるのか。世界遺産登録をきっかけに、自然と人間の共存、共生について考えていきたい。また登録の本来の目的を勘違いして、環境保護を「ユネスコがどうかしてくれる」と他人任せにする態度にならないように、自然環境を大切にすることの意義を自分自身との関わりで捉えていく必要がある。

自然との共存、共生を考える際には、人間が自然の主となって保護し愛するのではなく、自然に生かされていることへの感謝を抱き、謙虚に向き合おうとすることが大切である。むやみに自然を破壊するのではなく、可能な限り維持・保全しようとする意識が高まることが自然を大切にしようとする態度へとつながっていくのである。

(2) 生徒の実態について

「自然を大切にすること」は中学生であれば当然知っているであろう。しかし、「自然保護」「環境保全」を身近に感じる機会は少なく、「どこかの誰かがやること」とどこか他人事で語ることが多い。本時では、自然と自分とのつながりについて考え理解を深めていくことも目指したい。

③ 教材活用のポイント

○実際に環境の保全活動に取り組む人物の話は、自然との関わり方について大いなる示唆を与えてくれるものであり、その内容をしっかり理解することから始める。

○本文で紹介している二人は県外の出身であるが、だからこそ、「ウチナナンチュ」の自然に対する態度を考えるきっかけとなる。吹き出しの読者へのメッセージを発問として活用することもできる。

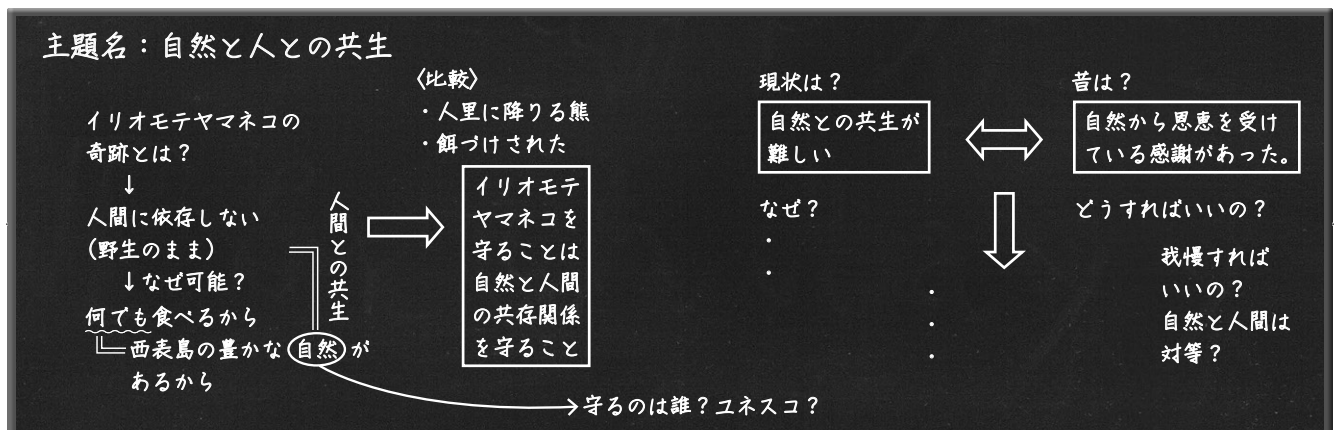
④ 他教科等との関連、家庭・地域との連携等

ヤンバルの森と西表島の自然が評価された点は「生物多様性」である。理科や総合的な学習の時間等で理解を深めて本時に臨むと、より環境保全への関心が高まる。また、海や山、自然の中で遊んだ思い出話を家族としてみるのも、沖縄の豊かな自然が実感できるだろう。

⑤ 評価のポイント

○自然と人間との関わり方の難しさに悩みながらも、謙虚な態度で環境保全に努めようとする前向きな記述・発言があるか。

板書例



6 学習指導過程

	生徒の学習活動	主な発問と予想される生徒の発言	発問の意図（＊）指導上の留意点（○） 補助発問（▲）
導入	(1) 教材を読む前に、知っていること、「自分の考え」を整理する。	○ 沖縄の世界遺産といえば何でしょう。 ・首里城 ・ヤンバルの森 ○ 2021 年、西表島が世界遺産に登録されました。登録されて良かったと思いますか。思いませんか。また、その理由を聞かせてください。 【登録されてよかった】 ・自然が守られるから。 ・有名になる。 【登録は必要なかった】 ・人が増えて、よけいに自然が壊される。（オーパーツーリズムの問題に気づいている生徒）	○ 世界遺産登録の本来の目的を知らない、もしくは勘違いしている生徒が多いので、授業中段の「守ってもらう」ではなく「私たちが守る」ものであることを印象づけるために、ここでは「自然が守られるから登録されてよかった」という生徒の意見が出ればそのまま残しておく。 (時間があれば) ▲ 同じ世界遺産でも、首里城と西表島の違いは何でしょうか。 ○ 文化遺産は、ある程度修復可能だが、自然遺産は一度壊れると元に戻るのに時間がかかる。もしくは不可能。そこから自然との共存を考えることもできる。
展開 1	(2) 教材「世界自然遺産」を読んで、内容を整理・理解する。	(高山雄介さんの話) ○ イリオモテヤマネコの奇跡とは何でしょうか。 ・人間に依存しないで生存している。 ○ なぜ、野生のまま生存できるのでしょうか。 ・何でも食べるから。 ○ 「何でも」=たくさんの種類の生き物がいるのはなぜですか。 ・島の自然が豊かだから。 ○ 世界遺産に登録されたことで、その豊かな自然は守られることになりますか？ (徳岡春美さんの話) ○ 「自然との共生が難しくなっています」とありますが、どうのことでしょうか。あなたもそう思いますか。 ○ 自然と人間の生活のバランスをどうやってとればいいでしょうか。徳岡さんはどう思っていますか。	○ 生徒に質問を投げかけながら、黒板に内容を整理していく。 ○ 豊かな自然が、人間と自然の共存を可能にしていることをおさえる。 ○ ここで、世界遺産登録の本来の目的を必ず確認する。「自然を守る」主体は「私たち」である。 ○ 高山さんの場合と同様に、生徒との掛け合いで内容を整理していく。
展開 2	(3) 班で話し合う。	◎ お二人とも、自然を守るのはそこに住む私たちだとおっしゃっています。では、沖縄の自然を守り共存していくために、どうすればいいでしょうか。 ・いかに自然が大事かみんなで確認する。 ・首里城と違って、一度壊れた自然は復元できないことを知ってもらう。 ・観光客を制限する。 ・人間も行動を制限して我慢するから、生物の居住区を制限してお互いに我慢する。	▲（言い換え）人間と自然が共存・共生するために大切な考え方、大切なことは何だろう。 ○ お二人が県外出身者であることや、二人の吹き出しのセリフに再注目するのもよい。 (ゆさぶりや問い返し) ▲ 「あれはダメ」みたいな押し付けの形にしたいのはなぜでしょう。 ▲ そもそも「観光客」の問題でしょうか。 ▲ 「お互い」とは。そもそも人間と自然・生物は対等なのでしょうか。自然を「自由に」「好きなように」使っているのは人間ではないでしょうか。 ○ ゆさぶりや問い返しで、深く考えさせる。
終末	(4) ノートに本時のまとめを書く。内省の時間。	○ 今一度、私たちが暮らす沖縄で自然と共存、共生するために大切なことはどんなことか、考えてノートに書きましょう。	* 授業を振り返り、自分の言葉で本時のまとめをすることで、より自分ごとになることを期待する。

MEMO

Handwriting practice lines consisting of multiple sets of horizontal dotted lines for writing.



MEMO

Handwriting practice lines consisting of multiple sets of three horizontal dotted lines for tracing and writing.



中学校道徳 沖縄県郷土資料集 指導案例

日本文教出版用資料〔道徳〕
令和 7 年（2025 年）10 月 1 日発行

編集・発行人 佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261
FAX：06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33796

日本文教出版株式会社

<https://www.nichibun-g.co.jp/>

大 阪 本 社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261 FAX：06-6606-5171

東 京 本 社 〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL：03-3389-4611 FAX：03-3389-4618

九 州 支 社 〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL：092-531-7696 FAX：092-521-3938

東 海 支 社 〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18・7F・B
TEL：052-979-7260 FAX：052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL：011-764-1201 FAX：011-764-0690